

研究 成 果 報 告 書

(ふりがな) ふるかわかつや

氏 名 古川勝哉

現 職 (所属名, 職名等) 上越市立中郷小学校, 教諭

修了又は卒業年月, 専攻又は専修コース名 平成18年3月, 生活・健康系コース保健体育科

I 対 象 : 小学校第3学年

II 活動名 : 「ドキわくランド」 (「多様な動きをつくる運動」)

III 活動の構想

本活動は, 不安定な場で体のバランスをとって移動したり, 跳んだりする遊びや動きを子どもが多様に考えて楽しむとともに, ドキドキわくわくする感覚を子どもに味わわせたいと考え構想した。そのために, i) 場作りの工夫, ii) 動きの視点の提示, iii) 仲間の3点を子どもが多様な動きをつくる視点として, 仮説検証的に実践をすることにした。

IV 実践の概要

始めに, 4つのアトラクションを提示した。i) 平均台の上を落ちないように渡るアトラクション, ii) 登り綱を登ったり振ったりして遊ぶアトラクション, iii) ミニトランポリンを利用してステージの上から跳び下りるアトラクション, iv) Gボール (バランスボール) を枠の中に敷き詰めその上で跳ねるアトラクションである。あえて単純な場 (アトラクション) を提示することで, 子どもの「場や動きを工夫したい」という意欲を刺激するようにした。そして, 「みんなでおもしろいランドをつくって遊ぼう」という声掛けのもと, ドキドキ, わくわくするアトラクションをグループに分かれて作り, そこでできる遊びや遊び方を仲間と考え, 楽しんだ。

1 場にはたらきかけ・はたらきかけられる

平均台のアトラクションをつくったグループは, 平均台に高低差を付けたり, 長い板を高い台に渡して橋のようにしたりする場をつくった。そのアトラクションで, 片足跳び, 走る, 後ろ向きで進む, お尻で滑る, 腹ばいで進む, 側転をする, ぶら下がって進むなどして楽しんだ。また, 平均台上にカラーコーンやコーンバーを置いて, それらを両足や片足でまたぎ越したり, くぐったりして遊んだ。さらに, 三角形のブロックマットや板と円筒でシーソーのようなものをつくり, 足場が急に「ガタン」と傾くスリルを楽しむ子どももいた。

子どもは, 「こんな場にしたらおもしろそうだな」というように, 場にはたらきかけたり, 「この場だったら, こんなふうに関くとおもしろそうだな」というように, 場にはたらきかけられたりしながら, バランスをとる様々な動きをつくり, その動きを獲得していった。つまり, 自己と場との相互作用によって動きをイメージしてつくり, そのコツをつかんでいったのである。

2 「動きづくりの視点」をきっかけに動きが広がる

ミニトランポリンを利用してステージの上から跳び下りるアトラクションをつくっ

たグループの子どもは、高いところから落ちる浮遊感や「ちょっと怖いけれどおもしろい」といったスリルを味わっていた。思い切り踏み切ると、約3メートルの高低差があり、子どもにとっては非日常の世界である。しかし、このアトラクションは、高いところから跳び下りるといった単純な遊びなので、踏み切りや着地のタイミング、空中での体のバランスをとるコツをつかむと、子どもはすぐにこのアトラクションに飽きてしまった。そこで、次に示す「動きづくりの視点」を子どもに与えた。

【動きづくりの視点】

- 回転（縦、横）
- 方向（上に、前に、左右に）
- 大きさ（大きく、小さく）
- まねる（友だちの動き、動物など）
- 一緒に（友だちと2人で、3人で）
- タイミング（同時に、ずらして）
- 競争する（高さ、距離など）

この視点をきっかけに、子どもの動きは一挙に広がっていった。ミニトランポリンで力強く踏み切ってから体を回転させ、バランスをとりながらきれいに着地する子どもや、手足を横に大きく広げてダイナミックに跳び下りる子どもの姿が見られた。また、天井から的をつけるし、その的にタッチする遊び（跳ぶ高さに挑戦する遊び）を考え、楽しむ子どもの姿も見られた。

ただ単に浮遊感やスリルを楽しむことから、「動きづくりの視点」と「こんなおもしろいことができそうだ」という自分の直感とを結び付けて動きを考え、工夫し、多様な動きから得られる感覚を楽しむようになったのである。

3 仲間にはたらきかけ・はたらきかけられる

ミニトランポリンを利用してステージの上から跳び下りるアトラクションでの子ども同士の話が多くなると、仲間と一緒にする動きも多くなっていった。仲間を誘ったり、仲間に誘われたりしながら、仲間と一緒に動きをつくったり、仲間と動きを合わせたりするおもしろさを味わうようになったのである。

この様子を見ていた他の子どもは、その動きに誘発され、動きをまねたり、さらにその動きから新しい動きをつくり出したりした。

子どもは、「動きづくりの視点」を仲立ちとして、仲間と感覚を共有したり、動きの差異を体感したりしながら、より発展的な場をつくっていったのである。

V まとめ

掲載できなかった他の2つのアトラクションを含め4つのアトラクションで子どもが考えた遊びや動きを分析すると、負荷（時間、強度）、空間（広がり、高さ、方向、経路）、関係性（もの、人、身体の各部位）などの要素がリゾーム状につながった動きとしてとらえることができる。子どもは、動きを要素に分解し、それを意図的に組み合わせる動きをつくったわけではない。ものや仲間とのかかわりによって感じるおもしろさに誘われ、結果として多様な動きをつくり、獲得していったのである。

子どもが運動する場や動きをつくる時間と、仲間と一緒に運動したり、動きや感覚を共有したりする時間を確保することは、子どもが自ら多様な動きをつくる視点として有効であったと結論付けることができるであろう。

<参考文献>

- ・細江文利他『体づくり運動の授業づくり』教育出版、2011年
- ・Graham, G. Holt/Haie, S. Parker, M.(2008) Children Moving A Reflectiv Approach to Teaching Physical Education Eighth Edition McGraw Hill.